大正期の服装改善運動における考案服の特質

—尾崎芳太郎著『是からの裁縫』における「経済服」の再現（一）—

夫馬佳代子・遠藤　綾子

一、はじめに

本研究は、大正期の服装改善運動の推進者であった尾崎芳太郎が執筆した『経済改善　是からの裁縫』前篇・後篇に記載される考案服を書籍に掲載される製作手順に基づき再現を試み、和服から洋服への転換期に如何なる発想で新たな時代に適応する近代衣服を生み出そうとしたかを、実証的に検証することを目的としたものである。

こうした研究に取り組む背景には、三十五年程前に、東京の本郷で「テーラー尾崎」を営んでみえた尾崎芳太郎の夫人に服装改善運動について聞き取り調査にお伺いしたことが遠因としてある。

げん夫人は、既に九十歳を過ぎてみえたが、当時の服装改良の活動について詳細に語られた。その中で、全国を回って新たな時代に適合する簡易服である改良洋服の指導・普及に取り組むとともに、次々と新しい考案服を考え出したが、実際に製作するのではなく机の上でいろいろと考え出し、『経済改善　是からの裁縫』に掲載した等、貴重なお話しを伺うことができた。『経済改善　是からの裁縫』の執筆者は尾崎芳太郎・げん、とご夫婦で連名執筆にされていることからも、げん夫人が改良服の考案・普及に果たした役割は大きいものと推測できる。こうした中での、げん夫人の発言は信憑性の高い貴重なお言葉であると捉えた。

『経済改善　是からの裁縫』に掲載される約百種近い考案服の多くは、恐らく実作されることなく、尾崎芳太郎の頭の中で描いた和服から洋服への道のりを示したものであると思われる。愛知県幡豆の横須賀裁縫学校の設立者であった和裁教授者の尾崎が、近代的衣服の考案を委託され普及運動に取り組むのは、かなり困難を極めたことが予想される。当時は、明治末頃から渡邊辰五郎のように、洋裁を学ぶために留学する者も現れる。洋裁を習得した者は、日本に洋裁技術を広めるとともに、洋服の仕立てに取り組む。こうした中で、尾崎芳太郎が和裁指導者であったからこそ、和服（着物）を基にした簡易洋服への移行という独自な発想が生まれたものと思われる。

『経済改善　是からの裁縫』に掲載される数々の考案服の再現に取り組むことは、当時の和裁教育者が考え出した、平面構成である和服文化から立体構成である洋服文化への発想の転換の過程を、形として明らかにすることができる。尾崎氏が独自に提唱した、「経済服」から「改良洋服」、さらに「簡易洋服」への発展は、和裁士であったからこそ、生み出した発想であったと思われる。

本稿では、尾崎芳太郎が初期に考案した「経済服」の再現により、当時の和服から洋服への移行を試みた苦心と独自の発想の一端を見出すことができたので、報告する。

二、大正期の服装改善運動の背景

（一）衣生活を取り巻く経済状況

明治期の衣服改良運動が、女子教育の影響を強く受けていたのに対し、大正期の服装改善運動は、世界的な不況による経済的な逼迫、物資不足という社会的な影響を強く受け、中間層の家庭では従来の衣生活を合理化せざるおえない状況が背景にあった。主婦を対象とした雑誌『主婦之

友』の掲載記事内容及び掲載記事数の変化をみると、大正六年から八年にかけては、衣生活に関する記事では布の節約・布の代用品・廃物利用の表現が多く用いられるようになる。また男物の衣服を女物や子供用に作り変える工夫も掲載される。家計に関しては主婦の内職を推奨する記事が書かれ、家計においても支出を抑えて、収入を増やし貯金する方法が伝授される。

具体的な家計モデルとしては、大正六年三月の家計に関する掲載記事「六十五円で六人家内生活法」のモデルでは毎月支出金六十五円の予算としながらも「被服費」は五円計上されている。ところが大正七年七月号掲載の家計モデル「絞出貯金の苦心談」では被服費は全く計上されなくなり、緊急時の貯金の必要性が強調される。

世界的な経済情勢がさらに厳しくなる大正九年から十一年にかけては、『主婦の友』の掲載記事には和服の再利用や一着で二通りの着方ができる工夫、洋服だけの生活に移行し二重生活をなくすことが推奨される。雑誌『主婦之友』では衣生活に関する「廃物利用」の記事が、大正六年から昭和初期まで継続的に掲載され、「廃物利用」の定期的な特集も組まれるが、昭和期に入り『主婦之友』附録『家庭報国廃物利用五百種』が発行される。経済の困窮化の中で考案された「廃物利用」の掲載記事の事例として「古くなった靴下の廃物利用」記事を見ると、古靴下に手を加えることで保存袋、敷物、脚絆、壁掛け、縫い合わせ羽織下、子どもの海水着まで創りだす考案が提示されるのである。

以上のように、大正期の世界的な不況及び物資不足の中で家庭生活を運営するため、衣生活に関しては、「布の代用」、「布の節約」、「廃物利用」等、様々な試みを行ったわけであるが、服装改善運動もこうした厳しい衣生活に対応し、従来の衣生活を合理化し、新たな時代に対応した衣生活を創りあげる役割を担っていたといえよう。

（二）生活改善運動と服装改善運動

大正期の服装改善運動は、生活改善運動の一環として、既に述べたように物価暴騰に対する生活経済上の解決策として行われた運動である。この運動の中心を担っていたのが「生活改善同盟会」であり、大正九年の文部省主催の生活改善講習会後に結成されたものである。この会は服装改善にも大きな役割を果たし、各地で服装改善講習会を開催した。

当時の雑誌等に掲載される服装改善の動向を示すものとして服装文化研究会編『名士の聲　これからの服装はドウ改善すべき乎』に寄せられた識者の改善に対する意見がある。これらの意見を総括すると、改善の方向として経済的合理性を追求し、一、二重生活を省く、二、子供は洋服、三、作業服には改良服、四、購買方法等の改善を求めていることが分かる。

但し、個々の意見を具体的にみると、生活改善運動の推進者と政府の官僚の立場により改善の方向性に異なる傾向がみられる。「洋装」を推奨しているのは、当時の農商務省、内務省、文部省等の官庁の役人の立場の者が多く、「二重生活の無駄を省くことが重要」「背広は便利で実用経済この上なし」「子供の洋服は妻の廃物利用で経費節減」「幼い時から洋服主義で」「家、住宅も一緒に改善されなければならない」「衛生上、経済上、活動上の理由から洋服が良い」「服装の購買方法の研究を」）等、洋装の利点と布材料、購買法の改善を提案している。

一方で、生活改善同盟会の推進者等は、新たに考案した日本式「改良服」の導入による服装の改善を目指している。生活改善同盟会調査委員であり家事改善会顧問・愛国婦人会理事の鳩山春子は「日本式改良服」を推奨し、「先ず作業服の改善から」とし改良服は日常服よりも労働服としての導入を推奨している。また生活改善服装調査委員長の宮田脩は「運動に適する改良服」を推奨し、「改良服はなるべく緩やかにし、ズボンも腰巻の上から履く」着装を提案している。生活改善同盟会調査委員で家事改善会顧問を務める三輪田元道は「子供服から改良」を推奨し、上下二部形式の形態を提案している。さらに生活改善同盟会調査委員であり女子医学専門学校校長の吉岡弥生は「礼装だけは従来の日本服を保

存したい」とし、作業服の改善を提案している。

このようにして改善案の方針をみると、明治以後、服制の制度的改革により洋装を積極的に受け入れてきた官僚は、これからの日本服として「洋装」の導入を想定していたことが分かる。一方、一般主婦を対象とした自主的な生活改善の普及を推進する生活改善同盟会調査委員の方針は、労働着、運動服、子供服など機能性が求められる活動服に徐々に改善服を導入する方針であったことが分かる。

また同時期、雑誌『婦人世界』『婦人の友』『婦人界』等の誌上講習では、改良服の考案・製作には反物巾が問題とされ、小幅から大幅布への転換も求められていた。

特に婦人向け雑誌『婦人の友』では、大正八年に婦人仕事着の「和服を元にした改良服」及び「洋服を元にした改良服」の懸賞募集を企画し、同年の七月（第十三巻七号）に当選作品「婦人仕事服（洋服式）」を誌上で発表し、翌八月（第十三巻八号）には「婦人仕事服（改良服式）」を発表している。こうした懸賞募集作品以外にも、大正八年から十年にかけて服装改善に関する論考や改善案が三十八件掲載され、簡易洋服を求める声も掲載される。この後、同雑誌は自分の家庭で安く経済的に簡易洋服を製作するための、西島芳太郎による誌上講習会を第十四巻九号から掲載する。第一回目の簡易洋服の誌上講習では、下着としてのペチコートなどから始まり、それ以後「西洋手拭からできる子供服」、「大人の古洋服で子ども服を作る工程」などの簡易洋服の製作法が掲載される。このように、誌上講習により、様々な簡易洋服の製作法や下着の製作、古着の再利用などの普及が試みられるのである。

三、尾崎芳太郎の考える服装改善と「経済服」

尾崎芳太郎は執筆した『経済改善　是からの裁縫』前篇・後篇において、尾崎が独自に考案した経済服などを提示している。既に述べたように、尾崎芳太郎は、大正期の生活改善運動の一環として取り組まれた服装改善運動において、日本服装改善会の裁縫指導者として服装改善運動を推進し、また和裁教育の立場から飛行式裁縫術と名づけた和裁の早縫い法を開発するなど、衣服形態の考案と技術開発の両面から、衣生活の改革に取り組んだ裁縫教育者である。

尾崎芳太郎が服装改善に取り組んだ背景については、『経済改善　是からの裁縫』前篇のはじめに記載されるが、そこには尾崎の日本の衣生活に対する危惧と動機が記されている。以下に掲載するのは、前掲書の抜粋文章である。

『経済改善　是からの裁縫』前篇　はじめに抜粋（一～二頁抜粋）

これからの日本服もつと働きよいやうに

此頃は大分世の中が忙しくなってまいりまして、諸々方々で『活動』だとか『労働』だとか言ふことがやかましくいはれる様になつて参りましたが、今までの和服は、此の點から申しますと誠に不向きに出来て居ります。働くに便利なといふことから申しますれば、朝鮮服や支那服の方がズッと優れて居ります。又、南洋あたりの土人の服なぞ御覧になつてもおほよそお判りになりませうが、おそらく世界中で和服ほど働くに不便な服装はありますまいと存じます。故にどうしても『働きよいやうに』と改良するのが日本服装改善の第一歩であると思ひます。

この前文からも明らかなように、尾崎が「これからの日本服」として求める衣服は「もつと働きよいやうに」と表現するように、働く婦人を想定した衣服であり、「おそらく世界中で和服ほど働くに不便な服装はありますまい」とし、「どうしても『働きよいやうに』と改良するのが日本服装改善の第一歩である」と提唱している。

大正期に入り、社会で働く婦人が出現し、こうした近代社会を象徴する婦人のための衣服を生み出すことが、生活改善運動の一歩となる、という考え方が尾崎芳太郎の考案服の根底にはあると思われる。

一方で、服装改善運動が急務として取り組まれた背景には、働く婦人の為の衣服の考案のみでなく、経済的な背景も存在していた。

『経済改善　是からの裁縫』前篇の前文にも、経済的な背景が記されている。

『経済改善　是からの裁縫』前篇　はじめに抜粋（二～四頁抜粋）

用布の無駄を省いて

次に吾々の被服の原料となる綿花や羊毛は、我が國では殆ど産出できません—巻頭「被服原料表」を御覧下さいませ。であるのに、和服は洋服の三倍の布を使つて居ります。例へば、背廣三つ揃一組は三ヤールつまり並幅の二丈八尺、丁度一反あれば其全部が出来上ることになる。そして洋装の禮服となります。けれども和服（普通仕立）では、長着が一反、羽織と袴で二反、都合三反なければ一揃の禮服は出来ません。彼の寒帯に住むエスキモー人種の服ですら（自然重りを多くせねばならぬ防寒服なるに）、和服ほどに無駄重りの多い仕立方ではないと聞いて居ます。かやうに和服が洋服よりも多く布を使ふのは、何故でせう?、重りが多くて布が無駄になるからであります。欧米はヒシヽと東洋を圧迫して、我が帝国の風雲刻々に急ならんとするの今日。吾々日本国民の被服主要原料を欧米に仰いで、如斯世界第一等の贅沢服、無駄服を纏ふて悠々たるものは、果して自覚ある國民と謂へるでありませうか、欧米人は吾人の和服姿を観て何と評して居ますか、……『遊民服』『お祭り服』『舞ふにはよいが働けない、そうして淫靡である』……と。いかにも残念です。トウしても大いに無駄を除く様にせねばなりますまい。

此の他に亦、衛生とか風儀とか色々改善したい點は沢山御座いせうが、今直ぐに！只今から！、断行せねばならぬ大きな缺點は、先づ此二つの問題であらふかと存じます。

尚之を細別いたしますれば、

改善の七要素

袖を短く、裾を工夫して働き易く

身幅を狭く、重りを少くして無駄を省く

今少し裁縫が簡単に早く出来るやうに

あまり腰やお腹を締めないやうに

下腹を冷やさない様に工夫する事

流行おくれにならないやうに

背丈を高くスラリと、スタイルを高潔に

是等の七要素を含て居るのが、私の所謂「これからの日本服」であります。

ここで尾崎が指摘しているのは、日本と西洋の布地の違いであり、日本の用布の無駄を指摘しているのである。尾崎は「吾々の被服の原料となる綿花や羊毛は、我が國では殆ど産出きません」とし、国内生産のみで被服の原料が確保できないことを危惧し、さらに「和服は洋服の三倍の布を使つて居ります」と用布の節約を主張している。日本の和服は反物三十六㎝幅の細幅織物文化とでもいえる独自の衣文化を形成しているのであるが、それが衣服の近代化の障害になっていると捉えている。さらに、和服ほどに無駄重りの多い仕立方ではない」とし、衣文化の近代化の為には、伝統的な着物の縫製方法から見直す必要があることを示唆している。こうした取り組みの背景には、単に経済の効率化を目指すのみでなく、「日本国民の被服主要原料を欧米に仰いで、如斯世界第一等の贅沢服、無駄服を纏ふて悠々たるものは、果して自覚ある國民と謂へるでありませうか」とする、欧米諸国に対する、当時の日本国民の意識も根底には存在していたものと思われる。

さて、具体的には、服装改善にどのように取り組むことができるのか。尾崎は前文で示した「改善の七要素」に加え、『経済改善　是からの裁縫』前篇　において、次のように述べている。

『経済改善　是からの裁縫』前篇　はじめに抜粋（四～五頁抜粋）

先づ内容から……次に外形も

改善すると申しましても、世の中はなかゝ理屈通りにはゆかないもので長い間の習慣と、趣味嗜好とを破ることは容易なことではありません。それに服装は食糧の事とちがって、外形に現れるものでもありますし、一方又住居にも関係のあるものですから、改善も順序よく考へませんと、折角の苦心も水の泡となり勝ちのものであります。

顧ふに、改善の必要を一番早く承知して呉れるのは頭騙で、又一番故障の多いのは眼であります。眼は『眼なじみ』と申しまして、なにより見慣れさせる事が大切で、眼慣れないものは、兎角彼是申して承知して呉れません。縫目が一つ少なくてもかれこれ言ふのは、皆眼の判断に任せるからで、これは頭騙の力の足らぬ方です。而しこれが多い。されば改善するには、先づ外形は其のまゝにして、内容をかへるといふことです。そして暫く経つ中には、又外形を改めてもモウ眼が不服を言ひ立てない様になつてまいります。故に『服装の改善は先づ内容から改めて次に外形も』と進まねばなりませぬ。

尾崎が求める新しい日本服は、従来の和服文化からの脱却であったが、「長い間の習慣と、趣味嗜好とを破ることは容易なことではありません」と記しているように、文化的伝統と慣習を変えることの難しさは認識していた。その結果、独自に生み出した考え方が「『眼なじみ』と申しまして、なにより見慣れさせる事が大切」とする考え方である。具体的には「『服装の改善は先づ内容から改めて次に外形も』と進まねばなりませぬ」とし、和服らしい外形を保ちながら、用布の節約及び縫製方法の合理化を徐々に導入していくことを考え出したのである。

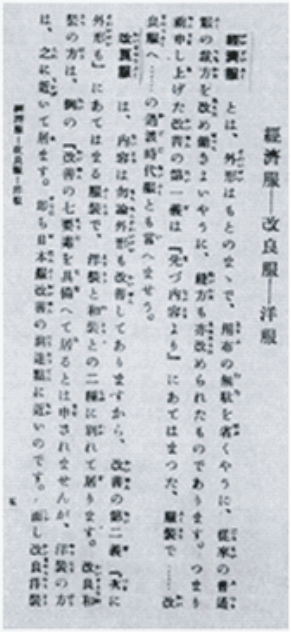
尾崎が考え出した『眼なじみ』とは何か、具体的には次のように記載されている。以下に抜粋する

『経済改善　是からの裁縫』前篇（五～六頁抜粋）（資料１）

経済服—改良服—洋服

経済服とは、外形はもとのまゝで、用布の無駄を省くやうに、従来の普通服の裁方を改め働きよいやうに、縫方も亦改められたものであります。つまり前申し上げた改善の第一義は、『先づ内容より』にあてはまつた、服装で……改良服へ……の過渡時代服とも言へませう。

改良服は、内容は勿論外形も改善してありますから、改善の第二義『次に外形も』にあてはまる服装で、洋装と和装との二種に別れて居ります。改良和装の方は、例の『改善の七要素を具備へて居るとは申されませんが、洋装の方は、之に近いて居ます。即ち日本服改善の到達點に近いのです。而し改良洋装は普通洋服の裁縫心得がないと、仕立ができませぬから、順序として、改良服洋服と掲げましたが、普通洋服が、改善の理想服ではありません。



資料１　掲載内容

洋服—従来の普通洋服は已に改善の主なる要素は具備へて居ますけれども、由其洋服は欧米人に適するのでありますから、其のまゝを採用しては、我が國の風土、骨格、人情などに適しません。之を適するやうに考へたのが、改良洋服です。改良洋服は今申し上げましたやうに、普通洋服が基點になつて居ますから、普通洋服の心得があれば苦もなく直ぐに仕立られます。今の處私は改良洋服が日本服装改善の到達點であると信じます。

サ！以下左の順序で講述いたしませう。

普通服から経済服……・・・
……経済服から改良服……・・・
……改良服から洋服……・・・

尾崎が提唱したのは、前文抜粋で示した「経済服」「改良服」「洋服」の三段階の考案服の普及法である。より具体的にみると、第一段階は「普通服から経済服」、第二段階「経済服から改良服」、第三段階は「改良服から洋服」とする普及方法を考え出したのである。

尾崎の想定する「経済服」は、「外形はもとのまゝで、用布の無駄を省くやうに、従来の普通服の裁方を改め働きよいやうに、縫方も亦改められたもの」（文中表現のママ）である。次いで「改良服」は「洋装と和装との二種」存在するとし、「改良和装の方は、例の『改善の七要素』を具備へて居るとは申されません」とし、洋装の方は「日本服改善の到達點に近い」としている。但し尾崎自身も「改良洋装は普通洋服の裁縫心得がないと、仕立ができませぬ」為、普通洋裁を取り上げているが、「普通洋服が、改善の理想服ではありません」と述べている。その考え方の根底には、「洋服は欧米人に適するのでありますから、其のまゝを採用しては、我が國の風土、骨格、人情などに適しません。之を適するやうに考へたのが、改良洋服です」とする考え方である。この「改良洋服」は、「普通洋服の心得があれば苦もなく直ぐに仕立られます」とし、現時点では「改良洋服が日本服装改善の到達點」との考えを示している。

さらに、尾崎は改良服の第一段階である「経済服」の特色について「普通服と経済服」の項で、次のように考えている。

『経済改善　是からの裁縫』前篇「二普通服と経済服」（七～九頁抜粋）

経済服十大特色

一、普通服より四分の一から五分の一の節布

普通服（普通仕立）に比べますと、凡そ四分の一から五分の一の用布が節約されますから其價もお安く上がります。例へば、普通仕立で一枚の本裁が四十圓かゝるものですと、此経済服に致しますれば、三十圓から三十二三圓位で出来上る勘定になります。

二、仕直しも普通服のやうに出来る

仕直し（仕返し）も普通仕立の着物と同じやうに出来ますから、この點は御心配はいりません。一體仕直しが度度出来るといふ事は、和服では最も肝心な事で御座います。一寸考へると和服は洋服よりも保ちが悪いやうに思はれますが、實際は思つたより、保ちがよろしい。といふのは保つのではなくて、仕直しをしては保たせるのであります。

三、縫ひ上りが早い

普通仕立よりズッと鋏を入れるところが、少ないのですから縫目が少ない、従つて縫ひ上りも早く、普通仕立にかかる時間の凡そ三分の一から二分の一位で出来上ります。

四、残りの布は小供服に

普通服（普通仕立）に要るだけの布で経済服を拵へますと、本裁では並幅の七八尺位は餘ります。中には、『折角一反の反物を買って餘しても』とおつしやる方もありませうが、少々工夫していただきますと、お格好な子供服が一着出来ます。子供服の合ふ合はぬといふ御心配はいりません。子供洋服を御参照下さい）子供洋服は飾りを考へて拵へますれば、祖父さまの残布で、まことに可愛らしいお孫さまのお召物も出来あがりますから、柄物の残布を洋装に利用されましても、随分格好いたしますが、改良服の和装に仕立ますればあまり考へなくとも、それゝ調和しいものが出来上ります。）子供物の御入用でないお方には「胴抜下着」や「裾廻」などに致しますれば随分贅沢な御召物も出来上ります。

五、古い普通服から仕直すにも便利

普通仕立の着物で、前身や衽も役に立たなくなつたのは、是非此経済服にしていただきたいものです。舊の通りの寸法に出来上つて、宛然新らしくなつたやうになり、又一代御召しになることが出来ます。

六、裁方はごく手軽

二尺幅物では、本裁も一つ身も同じ裁方で、並幅にも此の場合が随分あります。和服従来の裁方はなかゝ複雑なもので、少からず、婦女子の頭騙を苦しめたものです。之をごく簡単に手軽に改善いたしましたのが、此経済服であります。

七、並幅物は九寸五分以上

並幅は九寸五分以上、二尺幅物は凡そ一尺八九寸もあれば充分普通身幅に出来ます。若し特別に廣身幅の欲しい時には、地伸法を施すか、又特別な裁方によらねばなりませぬ。けれども、やたらに身幅をひろめるのは、背丈を低く見せて却つて格好を悪く致します。

八、地伸法は布幅を伸ばし地質を固める

布幅を伸ばし、地質を固め、縫物の場面をよくし、褪色を防ぎ、艶を出すなどの特色があります。新らしい木綿物には是非施していただきたいものです。地伸法を施して仕立ますと後で狂ひが出たり、汚點になつたりいたしませぬ。

九、経済服の主眼點は帯がくれの縫目

二尺や四尺の幅物には、前身の帯がくれのところに縫目があります。この裁目が経済服の出發點です。此裁目をお考へになると、随分面白い考案が生まれませう。

十、スラリとした型に出来上る

箆の付方が普通とは異なつて居ますから、腰がピッタリと締り、裾開きがよく、肩と胸元がスラリと調和いたして居ます。試みにお召になつて御覧遊ばせ、背丈がスラリと高く引き立つて参ります。

御注意

茲で一寸御注意しておきたいのは、裁方図だけを見てすぐに早合點をして、失敗したお方が随分とありましたから、特に箆付と縫方にも御注意を掃つて頂きたい事で御座います。此の三つが揃つて初めて身幅も廣く、着心地もよく骨格好のよい申分のない御召物が出来上るので御座います。

尾崎の考える「経済服の特色」として、次の十項目が挙げられている。

①「普通服より四分の一から五分の一の節布」では、着物に比べると「四分の一から五分の一の用布が節約」可能とし、着物の「普通仕立で一枚の本裁が四十圓かゝるものですと、此経済服に致しますれば、三十圓から三十二三圓位で出来上る」として経済面での節約に繋がることを強調している。

②「仕直しも普通服のやうに出来る」では、「仕直しが度度出来るといふ事は、和服では最も肝心な事」として、着物の特徴である布を再生し何度も活用する衣文化は経済面でも継承すべきとの考えを示している。

③「縫ひ上りが早い」では、「鋏を入れるところが、少ないのですから縫目が少ない」とし、構成を工夫することで「普通仕立にかかる時間の凡そ三分の一から二分の一位で出来上ります」と効率性を高める裁断法を強調している。

④「残りの布は小供服」では、「普通服（普通仕立）に要るだけの布で経済服を拵へますと、本裁では並幅の七八尺位は餘ります」として、この余り布から出来上がる子供服についても考案している。

⑤「古い普通服から仕直すにも便利」では、着物の「前身や衽も役に立たなくなった」部分を省いても新たな発想で経済服の製作が可能であることを示している。

⑥「裁方はごく手軽」では、「和服従来の裁方はなかゝ複雑」とし、経済服の特色は、和服の基本的な裁断法をより「簡単に手軽に改善」することであることを示している。

⑦「並幅物は九寸五分以上」では、広幅織物を活用する傾向を戒め、「並幅は九寸五分以上、二尺幅物は凡そ一尺八九寸もあれば充分普通身幅に出来ます」として、経済服は広幅織物を用いなくても製作できることを強調している。

⑧「地伸法は布幅を伸ばし地質を固める」では、日本の伝統的な地直しの利点も取り入れ、「布幅を伸ばし、地質を固め、縫物の場面をよくし、褪色を防ぎ、艶を出すなどの特色があります」と評価し、「新らしい木綿物には是非施していただきたい」と、経済服にも活用することを推奨している。

⑨「経済服の主眼點は帯がくれの縫目」とし、着物の帯がくれ部分（おはしょり）を布の縫い合わせ部分などに活用することにより「随分面白い考案」が生まれるとしている。

⑩「スラリとした型に出来上る」では、経済服では立体構成の発想を取り入れるため、「腰がピッタリと締り、裾開きがよく」と活動的な衣服に変化することを強調している。

興味深いのは、こうした「経済服」の特色十項目の最後の項に「ご注意」として「裁方図だけを見てすぐに早合點をして、失敗したお方が随分とありましたから、特に箆付と縫方にも御注意を掃つて頂きたい」と記され、誌上講習による裁縫の普及の難しさも指摘している。

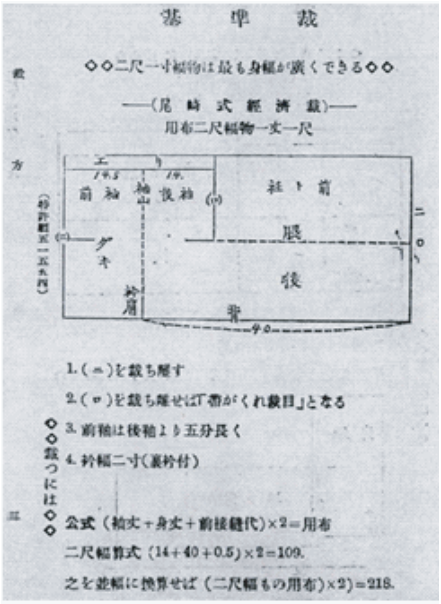
本報告では、前掲の十項目の特色が挙げられ「経済服」の誌上で紹介された作品の再現を試みる。

本報告（一）で取り上げる経済服の「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」は、尾崎の和服からの転換を示す考案服の代表的な形態と考えられる。

四、経済服「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」の再現

尾崎芳太郎著『是からの裁縫』の、「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」の製作過程を再現する。一反とは、並幅九寸五分で長さ二丈八尺のことである。

『是からの裁縫』において、裁ち方注意として以下の内容が記されている。



資料２　裁図と解説

特色

一反で八尺あまる本裁の特色は、以下の五つにまとめられる。

・二尺幅物ならば凡8尺、並幅物ならば凡そ6尺足らずの経済になる。

・残りの布は形を工夫して子供服にするか、又は引き返して裾回しにする。

・仕直しは自由にできるので、もし羽織に仕直そうという時は、只衿幅を少し加減すればよい。

・布幅の狭い時、特に身幅を広くしたい時には、それぞれ特別の仕立て方がある。

・普通の着物のように、縫目のある仕立て方もでき、又身幅も充分ある。

このように、一反で八尺あまる本裁は、用布が少なく、残り布を活用できる点が特色であり、体に合わせた特別な仕立て方や、普通の着物のような仕立て方もできるという特色がみられる。

また、裁ち方注意としてに関しても、は以下の二点が記載される。

すべて反物に尺を入れる時は、耳より二、三分向で計ること。耳は随分狂いがあるから。裁つ時には、あわてずに、充分ゆっくり落ち着いて裁たねばならない。そして間違いなく裁てたら、ドンドンと縫う。（文中

ママ）

以上のように、尺を入れる際に、耳には狂いがあるから二、三分多く測ることと、裁つ時はあわてずドンドンと縫う、という、測る時と裁つ時、縫う時の注意が示されている。ここでは、裁ち方の基本的な注意や気を付けることが記載される。

尺寸法・裁ち方・箆付

・尺寸法

江戸時代から主に布地の長さを測るのに使われていた鯨尺を使用する。これをcmにすると、一寸＝3.79cm、一尺＝37.88cm、一cm＝二部六厘四毛である。

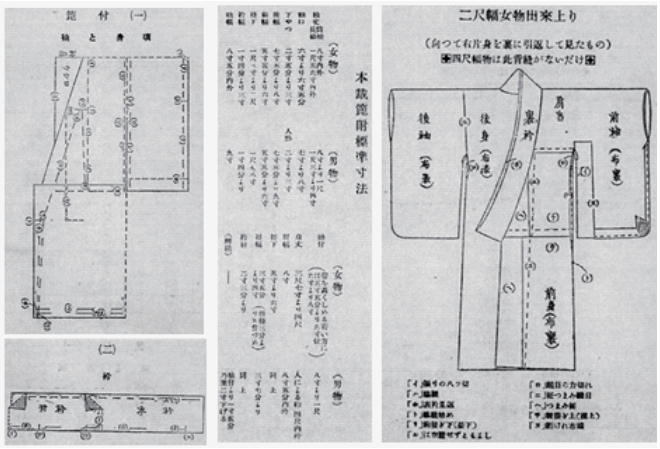
・裁ち方

本文中の裁ち図や注に記載されている寸法に従い製作する。「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」の裁ち図の特徴として、衿だけが別になっており、他の身頃や袖、衽などが全て続きになっていることがあげられる。切込や、前身・後身の長さは、標準寸法を参考に設定する。（資料２）

裁ち図に従って裁つと写真１のようになる。完成した際、着装者から見たときに写真上が右半分になり、下が左半分になる。

・箆付

標準寸法と手順に従って、資料２のように箆付をする。



資料３　掲載される箆付の手順

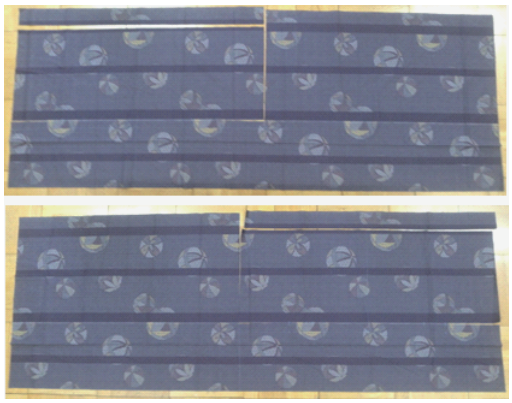


写真１　裁断法　上が右半分・下が左半分

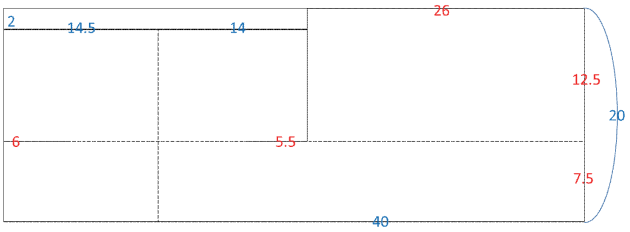


図１　裁ち図

縫製手順

本文の縫方に従い、衽、前接、褄下と裾、袖と袖口、衿の順に縫う。縫製手順は①～⑥に詳細を示す。

背縫い

背を中表にし、縫う。首から裾が真直ぐになるよう注意する。（写真2）

衽

衽は裁ち図より、続いているので縫う必要はない。しかし、前身の上の方が足りず三角の穴あきになってしまうので、衿付の前に、基準裁の次に載っていた袖衿裁の裁ち図を参考にし（資料4参照）、緑色の別布を補う。別布は標準寸法を参考にし、底辺四寸×高さ十四寸の三角形を左右二枚用意した。穴あきになっているところに、一cmほど縫い代をとり付け加える。（写真5）

前

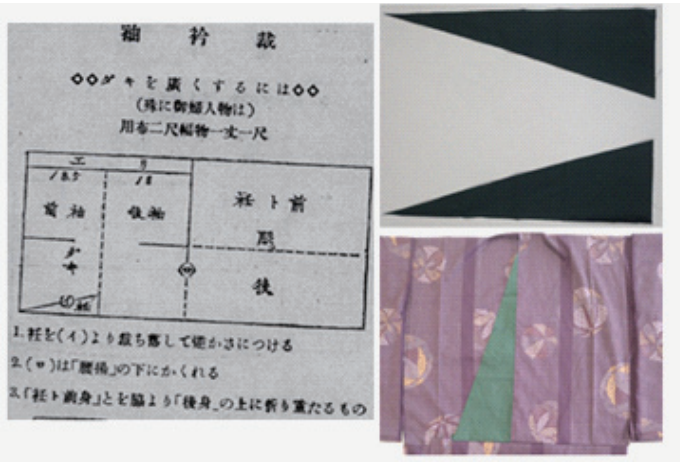
箆を合せて前接をする。中表に合わせ縫うが、脇がつらないよう注意する。縫代は伏せ縫い又はまつり絎をしておく。（写真3）

写真2　背縫い

写真4　褄下と裾は三ツ折絎

写真3　前接部分の縫代は伏せ縫・まつり絎け

写真６　着物の衿付け方法



資料４　袖・衿の裁図

写真５
衽の不足部分に別布を加える

裾下と裾

裾下と裾は三ツ折紵をする。真直ぐになるよう注意する。（写真４）

袖と袖口

袖口下を普通仕立に縫いにし、伏せておく。袖口は三ツ折紵をする。

衿

衿付は普通の着物の衿付と同じようにする。箆を合わせて、裏表にして縫い、身頃を挟んで、裏衿の接ぎ目のところで細く紵ける。（写真６）

写真７は完成した「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」である。左が前、右が後である。

復元した基準裁の特徴・用布は次のようになる。

形態の特徴

裁ち図の通りに裁つと、衽の上の部分が足らず三角形の穴が空く状態になるが、基準裁の後ろに記載されている袖衿裁を参考に三角の別布を付け足した。衿下の衽のところがやや斜めに箆付されており、紵けるときに箆付に沿ってやや斜めにしたところが形の特徴である。裁ち図は衿だけが別に裁たれるようになっており、身頃と袖が続きになっているので、鋏を入れるところが少なく、裁ち方が手軽であるといえる。また、

写真７　完成した前身頃と後身頃

脇縫いや袖付がなく、縫う箇所が少ないため縫い上がりが早いといえる。経済服の特徴である帯がくれの縫目も見られる。

用布

使用した布は、裁ち図より、二尺（75.8㎝）×五尺四寸五分（206.4㎝）×2＝31290.24㎠に、衽として付け加えた別布、四寸（15.2㎝）×十四寸（53.0㎝）÷2×2＝805.6㎠を加えて、32095.84㎠である。女物単衣長着は、並幅で一反1140㎝内外（1070～1250㎝）≒41040㎠必要なので、これと比べると8944.16㎠少ない布でできる。これは0.78倍となり、約五分の四の用布で製作できる。（注　数式は横書きで示すこととする）

写真8は、完成した「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」を着装した状態である。

写真8　着装

五、おわりに

本報告では、尾崎芳太郎考案の経済服「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」の再現を試み、製作過程を通して、尾崎考案の経済服の特質について明らかにした。

尾崎が提唱する「経済服」は①普通服に比べると、約五分の一の布が節約、②仕立て直しも可能、③普通服よりも縫い目が少ない。これにより仕立て時間が通常の三分の一、④余った残り布で子供服ができる、⑤外観は普通服である、⑥裁ち方が簡単、⑦並幅物は九寸五分あれば十分できる、⑧地伸ばし法の効果、⑨前身の帯がくれの所に縫い目がある、⑩見栄えが良い、などを特徴としてあげている。

今回製作の再現を試みた「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」について検証すると、①で示す布の節約に関しては、用布が従来の単衣長着に比べ五分の四で製作できることが実証でき、当時、用布の節約が緊急の課題であった状況では有効な衣服の考案であったといえる。一方で、衽布が不足するなど端切れを補充する必要がある。また、従来の平面構成は踏襲した形態であるため、②で示す仕立て直しは可能である。③普通服よりも縫い目が少ない点は、身頃・袖をつなげたて構成であるので縫い目が省略でき、縫製に要する時間も短縮が可能である。④余った残り布で子供服ができる点は、簡易な子供服であれば可能である。その他、⑥裁ち方が簡単、⑦並幅物は九寸五分あれば十分できる、⑧地伸ばし法の効果などについては、今回の再現により実証できた。また⑨で示す前身の帯がくれの所に縫い目を設けることにより、従来の着物を着装する場合に必要なおはしょりを設けなくても着装が成立し、帯で縫い目を隠すことにより、従来の着物に近い形態を作り上げる可能性を示している。

一方で、⑤外観は普通服である、⑩見栄えが良いなど、外観からの評価は、当時の着物に着慣れた人々への説得は困難であったことが推察される。着装写真8に示すように衿幅が狭いため胸元が開き、婦人用でも対丈となる等の課題が見られる。

尾崎の経済服を考案した最大の貢献は、従来の単衣長着の構成・縫製方法・縫製手順の基本的な発想から逸脱し、新たな平面構成の可能性を模索した点と、日本の緊急

課題であった物資不足、特に衣料不足への具体的な対応策を示した点であろう。

なお、本研究は、科学研究助成基盤研究C　課題「大正期の服装改善

運動が果たした役割について—考案服の復元による検証—」として助成を受けた研究内容の一部を報告したものである。書面にて厚く御礼を申し上げたい。

■参考文献

尾崎芳太郎著『是からの裁縫　前編』大正10年
池部芳子、川村キミ子、佐野恂子、柴田志げゑ、田尻寧子、永井房子著『改訂新版　新和服裁縫（全）』昭和49年
夫馬佳代子・松田純子「大正期の服装改善運動と裁縫教育内容の変遷—（1）婦人向け雑誌掲載の考案服誌上講習について—」、日本生活文化史学会会誌『生活文化史』第31号、平成９年
夫馬佳代子・松田純子「大正期の服装改善運動と裁縫教育内容の変遷—（2）『経済改善　是からの裁縫』における考案服「鋏いらず」について—」、日本生活文化史学会会誌『生活文化史』第31号、平成９年
夫馬佳代子・松田純子「大正期の服装改善運動と裁縫教育内容の変遷—（3）裁縫教科書における洋裁の導入—」、日本生活文化史学会会誌『生活文化史』第31号、平成９年